# 真･恋姫†無双 革命×戦国†恋姫X ～乙女絢爛 萌将伝～

ジェイ・デスサイズ

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

北条家の子達と祝言を上げて1年、剣丞達の活躍のおかげで日ノ本から鬼が完全に消えた。平和な日常を取り戻した剣丞達だが、気が付くと見覚えの無い所で目を覚ます。しかし、剣丞だけはその場所を知っていた。果たして、剣丞だけが知っていた場所とは？

剣丞が消えてから早2年、何かが爆発したような衝撃が屋敷に響く。確認へ向かう面々が見た光景とは？

作者が恋姫メンバーと戦国メンバーを会わせたら面白い事になるのでは？と言う思い付きから生まれた小説です。色々ツッコミ所が生まれる可能性はありますが、優しい目で読んでいただけると幸いです。

# 目次


第1話　交わる物語 ―― 1
第2話　重なる世界 ―― 12
第3話　交錯する言ノ葉 ―― 19
第4話　共に暮らす屋敷 ―― 32
第5話　三国戦国饗宴 ―― 37
第6話　尾張の大うつけと美周郎 ―― 44
第7話　今後の戦国組 ―― 49

# 第1話　交わる物語

とある日の昼下がり、神奈川にある片田舎の山の中。小鳥のさえずりが聞こえる静かな――――

ズドオオオン!!!

――言い直そう。【基本的には】静かな所だ。

???

「また真桜が何か爆発させたのかしら？」

真桜

「いやいや華琳様!?ウチ目の前におるやないですか!?」

華琳

「・・・真桜、自ら罪を認めると罪は軽くなるのよ」

真桜

「犯人ウチ確定の話ですか!?ホンマにウチやないですって華琳様～！」

華琳

「真桜の開発の爆発でないなら、さっきの音はなに？こんな山奥であんな音、それしか思いつかないのだけど」

真桜

「うっ・・・否定出来へんのが辛い。けどホンマにウチやないですっ」

真桜が華琳に抗議していると真桜の後ろから扉を叩くノックが聞こえ、華琳が「どうぞ」と答えるのを聞いてから女性が中に入る。銀色の長い三つ編みが印象的な女性だ。

???

「華琳様、真桜の仕業ではありませんでした。工房を確認して来ましたが、そういった痕跡はありませんでした。真桜の仕業じゃないとしたら・・・なんだったんだ、さっきの音は」

真桜

「凪ぃ・・・ホンマウチの味方やぁ」

凪

「一応、何かやらかしたら連絡するからな。真桜は一応」

真桜
「一応って2回もいるか!?」
華琳
「じゃあ、本当になんなのかしら・・・」
顎に手を付け華琳が考えていると、今度は美しい黒髪のサイドテールが印象的な女性が慌てた様子で扉を開けて入ってきた。
???
「華琳殿!?華琳殿はいるか!?」
華琳
「私なら居るわよ、愛紗。慌てるのは分かるけど落ち着きなさい。ノックもしないで入ってくるなんて、一刀にまた言われるわよ?」
愛紗
「ぐっ・・・そ、それを言わないで頂けると・・・ではない!音の正体が分かったぞ」
華琳
「なんですって?一体なんなの、あの音は?」
愛紗
「此処の近くにみんなが鍛錬等で使用している平地があるだろう?彼処に何か落ちたらしい」
愛紗は方角を指差しながら音の正体を説明する。
華琳
「落ちてきた…ですって?」
真桜
「て、テレビの見過ぎ・・・ってオチはないわな」
凪
「愛紗殿、詳細は分かるのですか?」
愛紗
「詳細は不明だ。今星が様子を見に行っている、何かあれば連絡を寄越す手筈だ」
華琳
「・・・よし。行くわよ」

そう言いながら立ち上がり、厩舎へ行こうとする華琳。その肩を掴み止める愛紗。

愛紗

「待て待て!?だから連絡が来るとーーー」

華琳

「愛紗、この私がこんな面白そうな事を見逃せる訳ないじゃない」

目をキラキラさせながら愛鎌【絶】を握りしめる魏の王。愛紗はこの目を知っている、(あ、これは何を言っても駄目だ)と察してしまった。

凪

「愛紗殿・・・」

愛紗

「凪・・・言わなくて良い」

華琳

「ほら、早く行くわよ!」

華琳はさっさと部屋を出て行き厩舎へ向かって行った。

真桜

「か、華琳様!置いて行かんといて下さい~!」

愛紗

「わ、我等も行くぞ!凪!」

凪

「わ、分かりました!」

4人が馬に乗り、音のあった方角へ向けて駆けていく。平地への道は車2台分通れる位あり馬で駆けて行くには何も問題は無い広さだ。鍛錬場の入口付近が見えてきた時に、道端に見慣れた馬が木に繋がれていた。趙雲【星】の馬に、孫策【雪蓮】の馬だ。そして直ぐ近くの木々の中で双眼鏡で様子を見ていたその2人も見つけた。

愛紗

「星に…雪蓮殿?」

雪蓮

「あら、愛紗じゃない。それに華琳達も。やっぱり気になって来た

のね？」
華琳
「えぇ、まぁね？何か見えたかしら？」
雪蓮
「それが・・・ねぇ、星？」
星
「良く見えぬが・・・人が多くいるぞ。まるで【我等がこの世界に来た】時の様に、な」
星がいつもの悪い顔をしながら見える様子を愛紗達に伝える。すると愛紗・凪・真桜は眼をぱちくりと瞬きしてから、眼を見開いた。
愛紗
「と、と言うことはまさか!?」
凪
「剣丞が・・・！」
真桜
「帰ってきたっちゅう訳ですか!?星はん！」
星
「剣丞が消えて早2年、しかも丁度消えた日が今日だ。可能性はあるだろう・・・だが、それなら剣丞1人のはずだ。他の人間は不明だ」
雪蓮
「どちらにせよ、どう近付こうかな～ってね」
手をヒラヒラし笑う雪蓮。すると華琳は何を言ってるの？と言う顔をし
華琳
「普通に行けば良いじゃない。剣丞ならそれで良し、違うのなら不法侵入で捕縛する。それだけのことよ」
雪蓮
「うわぁ・・・まぁ、確かにそうだけどねぇ」
星
「数が中々なのですよ、華琳殿」
星はそう言いながら双眼鏡を華琳に手渡す。受け取った華琳は迷

いなく双眼鏡でその光景を確認する。少し眺めた後、双眼鏡を星に返し、ふぅ、と溜め息を零す。

華琳

「そりゃ、どうしようか考える訳だわ。本当に私達が来たみたいな人数じゃない、あれ」

凪

「そ、そんなに大人数なのですか。華琳様」

華琳

「ええ、疑いたくなるけどね・・・他の者達に此処に来るように連絡を。とにかく、接触してみないと分からないわ」

雪蓮

「じゃ。真桜は他の子達に連絡してくれない？あたし達が行くわ」

真桜

「それは構いませんけど・・・気ぃ付けて下さいよ？凪、護衛任せたで」

凪

「あぁ、任せろ。参りましょう、華琳様、雪蓮様、星殿、愛紗殿」

華琳

「それじゃあ、行くわよ」

平野ｓｉｄｅ

???

「ん・・・んん・・・」

彼は倒れていた。決して誰かに負けて倒れたら訳でもなく、気絶した訳もなく。倒れてる彼の元に綺麗な黒髪の女性が駆け寄り、肩を揺らす。

???

「ーーすけ、剣丞！目を覚ませ、剣丞！」
剣丞
「んっ・・・く、おん？」
久遠
「おぉ！目を覚ましたか、剣丞！」
久遠と呼ばれた女性は、剣丞と呼ばれた男性の胸元に飛び付きぎゅっと抱き締める。
剣丞
「心配かけてごめん・・・此処は？」
優しく抱きとめて、久遠の頭を優しく撫でながら問いかける。久遠は顔を上げ周りを見渡しながら返答する。
久遠
「我にも分からぬ・・・気が付いたら此処に倒れておった。そして、我等全員居るようだ」
剣丞
「え、我等？・・・って事は!?」
剣丞は慌てて周りを見渡す。すると愛しの妻達が倒れていた。気が付いていた者は近くの者を揺すり起こしている最中だった。
???
「久遠～剣丞居た～？」
久遠
「結菜！うむ、此処に居ったぞ！」
結菜と呼ばれた女性は、駆け足で久遠の所へやって来る。長い栗色の髪を後ろで1つに止めているのが印象的だ。
結菜
「良かった、剣丞。無事だったのね。今起きてる子達が倒れてる子達を起こしに行っているわ・・・もう、何が何だか」
やれやれ、と言った感じに両手を軽く広げ頭を左右に振る結菜。久遠は改めて周りを見渡す。
久遠
「山奥・・・という事しか分からぬな。剣丞、お前は何か分かるか？」

剣丞
「って、言われてもなぁ・・・ん？」
軽く見渡していた剣丞の目に入ったのは切り立つ崖。その崖に近付き、手で触れ、周りを見渡す。
剣丞
「俺は・・・此処を知ってる」
久遠
「剣丞、何か分かったのか？」
結菜
「急にこの高い崖に来て、どうしたのよ」
剣丞
「2人とも、俺は此処を知ってるんだ。でも、それは俺達の世界にはないはずなんだ。この崖は俺が元の世界に居た頃、姉さん達に修行で登らされた崖なんだ」
剣丞の言った言葉に久遠は純粋に驚くが、結菜は驚き半分呆れ半分といった表情をしていた。
久遠
「な、何!?では、此処は剣丞の住んでいる世界なのか!?」
剣丞
「多分、だけどな？」
結菜
「それも驚きなのだけど・・・あんた、こんな崖も登ってたのね。そりゃ城攻めで【俺が城内に潜入する】なんて戯言言えるはずだわ」
剣丞
「うっ・・・ま、まぁ・・・上手く行ったし、な？」
結菜
「上手く行ったから良い訳じゃないわよ・・・全く」
剣丞
「仰る通りです・・・」
久遠
「剣丞の言うことが真実ならば・・・我等は剣丞の時みたいに【別世

界】、剣丞が居た世界に迷い込んでしまった・・・という事か！・・・・痛っ」
好奇心の眼差しで剣丞の顔を見る。その久遠の頭を叩く結菜。
結菜
「何嬉しそうにしてるのよ・・・全く」
頭を抑える久遠に、両腰に手を付け呆れる結菜。その３人の傍に１人の女性が近付いて来た。
???
「結菜様、周辺の偵察終了しました・・・ご主人様！久遠様も！ご無事で良かった・・・！」
剣丞
「小波！ごめんな、心配かけちゃって」
久遠
「すまなかった・・・と言うか、偵察？」
結菜
「ありがとう、小波。私が目を覚ました時に小波も起きてたのよ、それで此処は引き受けて小波には周りを見てきてもらってたのよ。それで小波。何か分かった？」
小波
「はい。日ノ本と断定するには情報が足りませぬが、日ノ本に近い地形をしておりました。此処の近くに建築物が多数ありましたが・・・見たことない様な造りでした」
久遠
「建築物か・・・エーリカに見せれば何か分かるかも知れんな」
剣丞
「エーリカが好きなのは日本の城だからなぁ。難しいだろうな」
久遠
「デアルカ・・・ではー」
久遠が言葉を発しようとすると、少し離れた所で大きな声が聞こえてきた。
剣丞

「な、なんだ?」
久遠
「行ってみるぞ!」
久遠達がその場に行くと見慣れた剣丞隊の面々に、その前に立つ女性の姿が見えた。
???
「あ・・・なっ・・・・」
剣丞
「どうした!?大きな声が聞こえたけど」
ひよ
「あ、剣丞様!無事で良かったです!」
ころ
「お頭!えっと・・・それが・・・」
詩乃
「我々が見知らぬこの地に居ること以上に・・・」
雫
「信じ難いことか・・・」
梅
「今、目の前に起こってるのですわ・・・」
剣丞・久遠・結菜
「「信じ難いこと?」」
3人は剣丞隊の面々の前に視線を移す・・・すると、信じ難い者を眼にする。まず3人の前に立っていたのは、小夜叉。いつも元気な小夜叉が身動き1つ取れず立ち尽くしている・・・その理由がその前に立っている人物。
久遠の為、剣丞の為、小夜叉の為、皆を生かす為。多勢の鬼を前にただ1人残った森一家の棟梁、森【桐琴】可成。その人が目の前に居るのである。
久遠・結菜
「と、桐琴・・・!」
剣丞

「桐琴さん・・・・!」
桐琴
「小僧!それに殿、結菜様まで・・・一体、どうなっておるのだ。まさか、全員揃ってこっちに来てしまった訳ではあるまいな。小僧、小夜叉」
剣丞・小夜叉
「ち、違うよ!?（違ぇよ!?）」
久遠
「桐琴よ、我等はまだ死んではおらぬ。その点に関しては安心せよ」
桐琴
「殿がそう言うなら、真実なのでしょう・・・それはそうと、【小夜叉】」
小夜叉
「っ!」
普段は自分の事を【クソガキ】と呼ぶ母が名前を呼ぶ、名前を呼ぶ時は大事な話をする時と小夜叉は知っている。
桐琴
「よくぞ、あ奴を切り伏せた。母として、誇りに思う」
桐琴は微笑みながら、優しく愛娘の頭を撫でる。それに思わず小夜叉はたまらず涙を零す。
小夜叉
「は、母ぁ」
桐琴
「くく、積もる話もあるが・・・殿、まずはワシらの状況を整理せんと」
久遠
「デアルナ。まず、我等だが・・・ほとんどが気が付いたら此処におったのだ。無論、我もだ」
桐琴
「ワシも気が付いたら此処におりましてな、何故死んだワシが殿達と同じ地に立っているのかが不明だが・・・まぁ、居るものは仕方あ

るまい」
剣丞
し、仕方ないって・・・」
桐琴の発言に苦笑いするしかなく、その反応した剣丞を笑いながらわしゃわしゃと頭を撫でた。そうしている間に、起こしに行ったメンバーが戻り全員集合状態になった。一葉が剣丞を見つけた途端飛びついたり・桐琴を見た綾那が「お母さん地獄から蘇ったですか!?」ととても驚いたり・小波から話を聞いたエーリカがその建物見たくて仕方なくなったりと別世界の不安より、好奇心が勝っているみんなであった。各々が話しをしていると、数人の女性が近づいて来るのに気が付いた。
久遠
「この世界の住人か?」
剣丞
「・・・え、マジでか?」
???
「貴方達、少し話良いかしら?」

# 第2話　重なる世界

幽

「さてさて、鬼を日ノ本から全て屠る事を見事成した我々。これから平穏な日々を過ごしていくかと思いきや、気が付けば見知らぬ地で倒れており、目を覚ます。はて、此処は何処なのか？困惑する我々の中で剣丞殿だけが知る所だった！そして我々に声をかけてきた人物、それは一体誰なのか・・・我々は、誰も知らない」

一葉

「幽、何を余達に起こっている事と今の現状を話しておるのだ」

幽

「これから読む者達の為に軽く説明を」

一葉

「ふむ、なるほど・・・？」

???

「そこの貴女、聞いてるのはこちらなのだけど・・・何明後日の方を向いて語ってるのよ」

幽

「おっと、これは失敬。ささ、お話を続けて下さいませ」

???

「調子狂うわね・・・まぁ、良いわ。それで、貴方達は何者なのかしら？」

鎌を持った金髪の女性に警戒しながらも、久遠は1歩出て返答に答える。

久遠

「名を聞くのなら、まずは自分の名を明かすべきではないか？」

???

「本来ならそうなんだけどねぇ、貴方達は私達の敷地内に勝手に侵入してるのよ。となると、自然と悪はそちらになる・・・分かるかしら？」

後ろから一緒に来ていたであろう褐色肌で桃色の長髪が印象的

な女性が話しかける。
美空
「ち、ちょっと待ちなさいよ！私達が侵入者って言いたいわけ!?」
日ノ本の為、仲間や剣丞の為に正義を成した・・・そして毘沙門天の加護を受けている美空にとって、【悪】が自分であるという事に納得がいかなかった。
???
「本当に侵入者なのか、否か・・・それを確かめる為に問うておるのだ。少々落ち着かれよ」
???
「本当に侵入者だったら、命知らずと言うか、田舎者と言うか・・・判断に悩む所だがな」
更に美しい黒髪と水色の髪をした女性が近付いてくる。現れた女性全員が只者ではないと、そして持っている武器を見て無意識に身体に力が入る。
久遠
「デアルカ・・・ならば、名乗らせてもらおう。【小波、剣丞を下がらせよ】」
久遠は句伝無量を使い、剣丞の近くにいる小波に指示を出す。指示を受けた小波は久遠の顔を見て頷き、剣丞と共に後ろの方へ下がった。
小波
「ご主人様、こちらに」
剣丞
「え？・・・わ、分かった」
剣丞と小波が下がったのを確認した久遠。相手は名乗ると言ったのに間がある事が気になった黒髪の女性。
???
「どうした、具合でも悪いのか？」
久遠
「っと、すまぬ。そうではない、安心されよ・・・では、改めて。

我が名は織田三郎【久遠】信長、織田家当主にして日ノ本を統一した者なり」

久遠が堂々とした振る舞いで自己紹介をし、それを聞いた女性たちは驚きを隠せない表情をしていた。鎌を持った金髪の女性は片眉を

ピクリを上げる。

???

「織田・・・ですって？」

久遠

「左様、我は織田だ。偽名でもなければ、嘘でもない。正真正銘の織田三郎【久遠】信長、である」

???

「可笑しいわね、私の知っている織田信長は天下統一出来ず、本能寺で亡くなった筈なのだけれど」

久遠

「（なるほど。此処はやはり剣丞の言った通りの世界か）そんな事、今はどうでも良い。こちらは名乗ったのだ、そちらも名乗るのが道理ではないか？」

???

「えぇ、そうね。では、私も名乗らせてもらうわね・・・私は、姓は曹、名は操、字は孟徳・・・三国同盟の一国、魏王。曹孟徳よ」

鎌を持った金髪の女性が自己紹介をする、すると最初に食いつたのは梅だった。

梅

「曹孟徳!?三国同盟!?そんな話、聞いたことありませんわ！それに貴女が本物だと言うのですか!?」

久遠

「梅、落ち着け」

梅

「し、しかし久遠様！」

久遠

「梅、下がれ」
低い声で梅を正気に戻し「はい・・・」と返事をし後ろに下がる。
久遠
「我が家臣が失礼、許して欲しい。しかし、梅が言ったこともまた事実・・・互いの認識に誤りがあるようだ」
曹操
「ええ、そのようね・・・でも、そちらにはそれを確認できる手札があると思うのだけど？」
久遠
「何・・・？（我等にその手札があると？・・・まさか剣丞か？そうだとして、何故剣丞を知っておるのだ）」
久遠が眉をひそめ、思考を巡らせる。それを見た曹操と名乗る女性は面白いのか「ふふっ」と笑みを零す。
曹操
「何で私が知ってるのか不思議な顔をしてるわね？」
久遠
「・・・良かろう。今の状況を変えうる札を、我は切るとしよう。わざわざ下がって貰ったのにすまぬな、剣丞。我の元へ来てくれぬか？」
剣丞
「気にしなくていいよ、久遠。オレの事を思って下がれって指示を出したんだろ？なら謝らなくても良い・・・よ」
久遠にいつもの様に語りかけながら前に歩いてくると、女性達の顔を見ると真顔になり、曹操と名乗った女性と水色の女性以外が驚いた表情をし、剣丞の名前を呼ぶ。
???
「「「け、剣丞!!」」」
剣丞
「愛紗姉！凪姉！雪蓮姉！」
互いに名前を呼び合う双方を見て、久遠達はポカンとした表情をした。そして曹操と名乗った女性と水色の女性はやっぱりか、と予想

通りと言わんばかりの表情をしていた。
光璃
「剣丞・・・知り合い？」
可愛らしく小首を傾げ、剣丞に問いかける。
剣丞
「あ、あぁ・・・前にオレに多くの姉さん達が居るって話をした事あっただろ？」
美空
「確か、剣丞に修行を付けてくれたって言ってたわね・・・って、まさか」
光璃
「この人達が、そのお姉さん達？」
剣丞
「そ、そういうこと」
剣丞の言葉で正気を取り戻し、改めて曹操と名乗った女性と向き直す。
久遠
「・・・剣丞が居ることを、知っていたのか・・・？」
曹操
「知っていた、と言うより予測ね。今日は剣丞が蔵で消えて丁度2年が経つのよ、だから戻ってきたのかしら・・・と思ってたら、見知らぬ女性が大勢居た、と言った所ね」
久遠
「デアルカ・・・「剣丞！」ん？・・・って、なぁ!?」
久遠と曹操が話していると、剣丞が凪姉と呼んだ女性が剣丞を抱き締めていた、
凪
「心配していたんだぞ、剣丞・・・しかし、元気そうで良かった」
剣丞
「ご、ごめん凪姉・・・あの時、刀持ったら急に光りだして気が付いたら・・・」

愛紗
「あぁ、私達も分かっている。別世界への転移・・・だろう？」
剣丞
「う、うん」
その返事を聞いた凪という女性は剣丞を離し、曹操へと質問をする。
凪
「華琳様、剣丞は本物で間違いありません。剣丞本人の氣です・・・ですが、この後如何致しますか？」
曹操
「そうね・・・（プルル）あら、ちょっと失礼」
そう言うとポケットから細く四角い板を取り出し、誰かと会話を始めた。
一葉
「主様、あれはなんだ？あの者は誰と話しておるのだ？」
曹操の行動が疑問だったのか、一葉が剣丞の隣にひょこっと現れ問いかける。
剣丞
「あぁ。あれは携帯電話って言って、あれで遠くの人と会話することができるんだよ」
一葉
「ほほぉ・・・小波の句伝無量のようなものか」
剣丞
「まぁ、そんな感じかな」
剣丞と一葉が話していると「待たせたわね」と曹操が会話を終わらせて戻ってきた。
曹操
「とりあえず、中で話しましょう。場所は用意させたから、着いてきて貰えるかしら？」
久遠
「・・・分かった、よろしく頼む」

久遠の返事を聞いた曹操はくるりと背を向け「着いて来なさい」と言い残し、歩いて行く。他の女性達もそれについて行く。

美空

「ちょ、久遠っ!?」

久遠の肩を掴み、小声で訴える美空。それを予想してか慌てる様子なく久遠は答える。

久遠

「分かっておる。仮に本当に剣丞の姉達とはいえ、我等にも友好的かは不明だ。故にみな、警戒を解くでないぞ?」

光璃

「ん、了解」

一葉

「だな・・・では、参るか。主様」

剣丞

「大丈夫だと思うけど・・・まぁ、程々にね?（姉さん達が何かイタズラ仕掛けてなければ良いけど）」

こうして、曹操の誘いを受けて久遠達は移動を開始する。

# 第3話　交錯する言ノ葉

曹操の話を受けた久遠達、曹操達は馬に乗り直し家へ案内する。少しすると大きな建物が姿を現し、厩舎付近に女性がおり、何やら準備をしているように見える。

???

「真桜！まだ準備は出来んのか!?」

真桜

「だから春蘭様！華琳様はこっちに戻ってくるって連絡来たんですって!?」

春蘭？

「何っ!?なら何故早く言わんのだ！」

真桜

「聞く前に飛び出したやないですか!?」

春蘭？

「なんだと！」

???

「まぁまぁ、姉者。落ち着け」

春蘭？

「しゅ、秋蘭～」

華琳

「貴女達・・・いったい何をしているのよ」

漫才の様なやり取りを見て、呆れながら声をかける。その声にいち早く反応した【春蘭】と呼ばれた女性。

春蘭？

「華琳様!!」

秋蘭？

「華琳様、お帰りなさいませ」

黒い長髪で眼帯をしているのが【春蘭】と呼ばれた女性、水色のショートカットで前髪で片目を隠している女性が華琳を向かい入れる。

秋蘭？
「華琳様、その・・・後ろの大勢の者達は・・・って、剣丞!?」
華琳
「秋蘭、言いたい気持ちは分かるけど今は置いておいてもらえるかしら？それと真桜、月を連れてきて、剣丞と数名を客間へ案内してちょうだい。剣丞、貴方の他に・・・そうね、織田殿と同じ地位の人物を数名選びなさい」
秋蘭と呼ばれた女性は直ぐに落ち着き「かしこまりました」と返し、真桜と呼ばれた女性は「了解ですっ」と大きめな声で返し屋敷の方へと走っていった。
華琳
「じゃあ、私は先に行ってるわね。剣丞、月が来るまでに決めておきなさいね」
曹操はそう言い残すと屋敷へと入っていった。曹操と共に居た女性達も屋敷へと入っていった。
久遠
「して、剣丞。曹操殿はあぁ言っていたが・・・行くのなら我の他に一葉、美空、光璃であろうな」
剣丞
「あれ、朔夜は？」
北条【朔夜】氏康。現北条当主は娘の北条【十六夜】氏政であるが、色々な面でサポートしているのが母親の朔夜だ。十六夜では決めきれない物の相談も受けているので、表では十六夜が当主だが、朔夜が決定している点も多い為こう言った話は朔夜に行く事が多い。
美空
「朔夜なら【私は出ないからよろしく～】って言って後ろの方へ居るわよ・・・」
剣丞
「えぇ・・・朔夜らしいっちゃらしいけど」
光璃
「だからって、十六夜を連れて行くわけにも、行かない」

一葉
「そうだな、であれば我ら４人と主様の５人と言う事になるな」
久遠
「後、結菜もだな。奥について説明しないといけないかも知れぬ。結菜、共に来てくれ」
結菜
「ええ、分かったわ久遠」
久遠
「小波、他の者達に此処で待って置くように知らせて来てくれ」
小波
「承知」
剣丞達が相談していると、屋敷からメイド服を着た小柄な女性が剣丞達の方へ歩いてきた。その女性は剣丞の姿を見ると目を見開き、その後嬉しそうに微笑んだ。剣丞の前まで歩いて来ると
月
「お帰り、剣ちゃん。無事で良かった」
と声を掛けながら剣丞の頭を優しく撫でた・・・少々背伸びをして。
剣丞
「た、ただいま？月姉」
月
「うん、ちゃんと言えて偉い。もっとお話ししたいけど華琳さんにお願いされてるから、また後でね？じゃあ剣ちゃん、他に来る方と一緒に着いてきて？」
そう言うと踵を返し、屋敷へと歩いて行く。剣丞は久遠・結菜・一葉・美空・光璃の５人を連れて月の後について行った。
屋敷内は見た目と同じく大きな造りになっており、久遠達の見慣れた【和】の所もあれば見慣れない所もあった。階段を上り少し歩くと他より豪華に造られた扉に辿り着いた。月は特に気にせずノックを３回し「華琳さん、月です。　連れて参りました」と告げると「どうぞ」と中から曹操の声が聞こえてきた。許可を得たのを確認し月は

「失礼します」と言い終えた後扉を開け、剣丞に「どうぞ」と優しく微笑む。剣丞は反射的に月に軽く頭を下げてから中へと入る。
中は客間と言うには豪華な造りをしていた。言うなれば【玉座の間】と言う言葉が似合う造りになっていた。大きなソファにテーブルを挟んで1人がけソファが3つ、窓側のソファに曹操、真ん中と扉側のソファは空席のままだった。剣丞は部屋の造りを知っているので初めに座る席に腰を下ろす。それに続いて久遠達も腰を下ろす・・・すると経験したことのない感触が伝わってきた。

美空
「きゃっ!な、何この椅子!?」

光璃
「座ったのに、戻された?」

曹操
「あ、そう言えば【ソファ】なんて戦国の世には無い物だったわね」
ソファの反発に耐えた一葉は「そふあ?」と首を傾げる。

曹操
「ええ、ソファ。表面は革張りのものもあれば、布張りのものもあるわ。枠は木や金属で構成されていて、中には座り心地をよくするクッションと呼ばれる物が入っていてコイルばね、スポンジ、ウレタンなど弾力性のあるクッション材を使っているわ」

久遠達
「・・・」
5人は目をぱちぱちさて、何を言っているんだと言うような表情をしていた。それに気付いた剣丞はフォローを入れる。

剣丞
「あぁ～・・・要するに、座る時に身体に負担を掛けないようにして快適に座れる椅子って事だ」

久遠
「デアルカ・・・」
ソファに手を当て、押して感触を確かめる久遠。そうしていると、扉からノックが聞こえ「華琳?入ってもいいかしら?」と初めて

聞く別の声が聞こえ「えぇ、良いわよ」と曹操が答える。中に入って来たのは2人、1人は剣丞が雪蓮姉と言っていた人物に似ていたが顔つきや髪の長さ、雰囲気で別人と言うことが分かる。肩付近で切り揃えた桃色の髪、もみ上げが伸びており胸近くまであった。もう1人は髪色は似ているが此方の方が多少濃い桃色だ、腰まで伸びており印象は温厚そうな人物。剣丞達を見ると、柔らかく微笑み、真ん中にあるソファに座った。雪蓮姉と呼ばれた女性に似てる方は扉側のソファに座る。

華琳

「さて、揃ったわね・・・では、始めるわよ。まずは剣丞、貴方が私達の知る剣丞と言うのは確認できてるわ。だから先に彼女達について教えて欲しいわ」

手足を組み、華琳は剣丞に説明を求む。その姿勢はいつもの事なのか他2人は何も言わず、剣丞も特に気にせず返事をする。

剣丞

「分かった。じゃあ皆んな、姉さん達に自己紹介してもらえるかな？」

久遠

「うむ、分かった・・・曹操殿には先程名乗ったが、改めて。我は織田三郎【久遠】信長、織田家当主にして日ノ本を統一した者だ」

曹操は事前に聞いていた為、微動だにしなかったが他2人は眼を見開き驚いた表情をしている。続いて久遠の隣にいる結菜が自己紹介をする。【剣丞・久遠・結菜・一葉・美空・光璃の順で座っている】

結菜

「織田久遠、新田剣丞が妻。齋藤【結菜】と申します、以後お見知り置きを」

頭を下げながら言った結菜に対し、今度は曹操含め3人揃って「え？」と顔をした。3人を置いておきそのまま次々と自己紹介をする。

一葉

「次は余だな。我が名は足利【一葉】義輝、足利幕府13代将軍

じゃ。だが、今は主様の率いる【剣丞隊】の一員の1人で、正室の1人じゃ」

美空

「次は私ね？越後国主、長尾【美空】政虎。景虎の方が馴染みがあるのならそちらで構わないわ。私も一葉様と同じで、正室の1人よ」

光璃

「・・・甲斐、信濃国主。武田【光璃】晴信。同じく、正室の1人」

各々の自己紹介が終わり、3人を見てみると曹操は呆れた表情をし剣丞を見つめ、真ん中に座る彼女は「え？え？」とし、扉側に座る彼女は頭を手で支えていた。

剣丞

「えっと…姉さん達、大丈夫？」

華琳

「・・・予想はしてたつもりだけど、その予想の斜め上を行くとは」

??

「ねぇ、華琳。彼女達の言っていること、本当なの？」

華琳

「蓮華、気持ちは分かるけど私達も似た様なものでしょ？」

蓮華？

「そ、それはそうだけど・・・」

??

「と、とにかく。次は私達が自己紹介しないと！ね、2人共」

蓮華と呼ばれる女性を落ち着かせる真ん中の女性、それに対し「私は外で伝えてあるから2人が言いなさい」と言い、剣丞達と向き直る。

蓮華

「もう、勝手なんだから・・・（コホン）では、私から。私は姓は孫、名は権、字は仲謀。三国同盟の一国、呉王。孫仲謀よ」

??

「私は姓は劉、名は備、字は玄徳。三国同盟の一国、蜀の主。劉玄徳です」

孫仲謀と名乗る女性は真面目な表情で名乗り、劉玄徳と名乗る女性は柔らかく微笑みながら名乗る。それを聞いた5人は当然の如く目を見開きポカンとしていた。

華琳

「・・・まぁ、互いにそうなるでしょうね」

剣丞

「あぁ～・・・何となく予想してたけど、やっぱりそうだったんだな」

華琳

「そういえば、そこまでは話してなかったわね。別に隠してるつもりは無かったのよ？」

剣丞

「姉さん達から、別世界の事を聞かされてたからもしかしてって気はしてたけどね。まさか三国志とは思ってなかったけど」

苦笑いをしながら頬をかく剣丞。

華琳

「まぁ、その話は置いておきましょう。今は先に剣丞の話が優先よ」

剣丞

「分かった・・・刀を持った俺は強い光を浴びてーーー」

剣丞の・・・いや、剣丞達の物語を3人に聞いてもらう。時折久遠達が詳細を説明したり、質問に対して答えたりし話終える時には日が落ちていた。

剣丞

「ーーーって、感じかな。もっと細かく色々あったけど、取り敢えず大まかな所を話させてもらったよ」

曹操達3人は、嘘を言っていないと眼を見て判断していた為真面目に話を聞いていた。劉備と名乗った女性が太ももの上に手を置き直し

劉備

「そうだったんだね・・・みなさん、剣丞君を助けてくれて、心配

してくれて、守ってくれて・・・そして、愛してくれてありがとう」
と、心から嬉しそうに感謝の言葉を告げる。
久遠
「れ、礼を言うのは我々の方だ。劉備殿・・・貴女達が剣丞を鍛えてくれたお陰で、今我々が此処に居るーーーいや、生きることができている。ありがとう」
少し戸惑った久遠だが、久遠も本当の気持ちをぶつける。そこにふふ、と笑う曹操が1つ付け加えた。
華琳
「まぁ、正確に言うと桃香は特に教えてないんだけれどね」
戦国組
「・・・え?」
劉備
「華琳ちゃん、酷い!?」
華琳
「貴女が教えたのと言えば、ゲームによるとんでもない運の高さ位じゃないの?」
孫権
「・・・言えてる」
くす、と笑いながら同意する孫権と名乗る女性。
劉備
「蓮華ちゃんまで!?2人共酷いよ~」
孫権
「ごめんごめん」
華琳
「さて、話を戻しましょうかーーー私達からも礼を言わせて頂戴?この子を信じてくれてありがとう」
孫権
「ありがとうね。この子と共に歩いてくれて」
そう礼を述べた2人は優しく微笑んでいた。この3人の顔を見ただけで、どれだけ剣丞の事を大事にしているのかが分かった。

久遠
「剣丞、良い姉を持ったな」
剣丞
「久遠・・・あぁ、だろ」
華琳
「だけど、1部を除き全員が嫁とはねぇ？誑す術なんて教えた覚えなんてないんだけどね」
剣丞
「ぶっ!?」
良い雰囲気を華琳の一言で粉砕された。
華琳
「一刀も一刀だけど、剣丞も剣丞ね？人数なら良い勝負じゃない」
剣丞
「伯父さんと一緒にされるのは嫌だけど、否定できない・・・っ」
姉に弄られる夫を苦笑したり、呆れたり、笑ったりしながら眺める嫁達。すると何かを思い出したかのように劉備が手をパン、と叩いた。
劉備
「そうだ、織田さん達が住む所をどうにかしないと！まだ部屋って残ってたっけ？」
孫権
「個部屋と大部屋が少しだけね・・・後は宴会とかに使う大広間くらいかしら」
華琳
「新しい住まいに関しては、真桜に命じておくわ。流石に1ヶ月とはいかないけど・・・なるべく早く住める様に進めるわ」
光璃
「・・・そこまで、してもらうのは、気が引ける・・・けど」
美空
「私達はこの世界の建築物の建て方なんて知らないし、そもそも私達の中で建てられる様な子も居ないしね」

一葉
「うむ。ここはお言葉に甘えさせてもらうのが良いじゃろうな」
結菜
「剣丞の姉様方、面倒をお掛けし申し訳ございません。よろしくお願い致します」
久遠
「剣丞の姉様方、ありがとう。感謝する」
戦国組が各々述べ、織田2人が感謝の言葉を告げる。それに対し「気にしなくていいわよ」と華琳が言い、笑みを浮かべる。
孫権
「そういえば、貴女達の【真名】は私達の【真名】とは違うのね？」
美空
「まぁ、そうね。基本的には【通称】として扱ってるけどね」
光璃
「でも、誰にでも許してる訳では無いから・・・大体は、同じかも」
一葉
「・・・と言うことは、余らが間違えて曹操殿の真名を言っていたら武器を向けられていた訳か」
華琳
「そういうことよ。まぁ、それも元の世界での話。こちらに来てからは一刀や剣丞の様に名前に真名を使用しているわ」
久遠
「デアルカ・・・ん？そういえば一刀、とは？」
劉備
「織田さんの方で言うと、剣丞君と同じだよ。私達の中心の人」
変わらず優しく微笑みながら教える劉備。
美空
「・・・って事は、その一刀って人も誑しって事なの？」
孫権
「・・・ストレートに言われると、結構来るわね」
光璃

「すとれーと？」
孫権
「あぁ、真っ直ぐと言う意味よ」
華琳
「一刀に教えられたり、指摘された事を教える日が来るなんて夢にも思わなかったわ」
苦笑しながら手をヒラヒラと振る曹操。
劉備
「あはは・・・あ、それはそうと。私達の真名も教えておかないと」
久遠
「よ、良いのか？」
華琳
「ええ、構わないわよ。さっきも言ったけど、此処では名前と言うのが私達で言う【真名】、此処で出来た友人にも言ってるしね」
一葉
「ふむ・・・【郷に入っては郷に従え】、と言うことじゃな」
蓮華
「そういうことよ。じゃあ私から言うわね？私の真名は【蓮華】よ」
桃香
「私は【桃香】、よろしくね皆さん」
華琳
「私は【華琳】よ、よろしく頼むわね」
戦国組
「よ、よろしくお願いします」
華琳
「剣丞、彼女達の【真名】を改めて教えてくれるかしら？」
剣丞
「了解。オレの隣から【久遠】、【結菜】、【一葉】、【美空】、【光璃】」
名を呼ばれた彼女達は改めてペコ、と頭を軽く下げる。
桃香

「あはは、これから楽しくなりそうだね」
久遠
「うむ、我も同意見だ。桃香殿」
久遠が同意に対して「む～」と拗ねた子供のような表情をする。
久遠
「い、如何したのだ？桃香殿」
桃香
「それ！それだよ久遠ちゃん！」
久遠
「ちゃ、ちゃん／／／!?」
唐突にちゃん付けで呼ばれ頬を染める久遠に対して、お構いなく告げる桃香。
桃香
「剣丞君のお嫁さんなら、もう私達とも家族みたいなものだよ！だから殿とか仰々しいのは禁止！」
久遠
「なっ!?あ、いや・・・しかし」
久遠はチラッ、チラッ、と左右な座る2人に助けを求めるが・・・現実は上手くいかないものだ。
華琳
「・・・久遠。諦めなさい、こう言い出した桃香は変える気無いから」
久遠
「わ、我とてこればかりは譲れん！夫の姉を友人のように呼ぶなど！」
結菜
「桃香さん、ごめんなさいね？久遠、恥ずかしがり屋だから」
久遠
「ゆ、結菜!?」
しれっと名前を言って、説明をする結菜に対して驚きの声を出す久遠。それを聞き少し楽しげに納得する桃香。

桃香
「あぁ～、なるほどなるほど。愛紗ちゃんと同じ感じだね」
蓮華
「はいはい、桃香もそれくらいにして。皆んな待ってるんだから」
華琳
「それもそうね。じゃあ早速戻って話をー」
してきましょう、と華琳が言おうとした瞬間、ガキィン!!と金属同士が激しくぶつかり合ったかの様な音が聞こえた。
華琳
「爆発音の次は金属音？一体誰・・・の・・・剣丞」
呆れ顔から段々と苦虫を噛み潰したような顔をし、剣丞を呼ぶ。
剣丞
「な、何？華琳姉」
剣丞も様子が可笑しいのに気付き、少々身構えてしまう。しかし、華琳の言葉は次の様なものだった。
華琳
「貴方のメンバーで・・・【血の気が多い】子って居るかしら？」

# 第４話　共に暮らす屋敷

剣丞
「え?・ま、まぁ・・・いるけど?・・・・まさか」
剣丞は質問され、何も疑わず返事するが返してから質問の意図に気付き剣丞も華琳と同じような顔をした。
華琳
「えぇ、そのまさかよ。時間を掛けすぎたわね・・・恐らく月が中へ入れたと思うけど、話している間にそういう話題になったんでしょうね。春蘭辺りが【誰が1番強いんだ?】って聞いて【まぁ、私の方が強いがな!】とか言ったんでしょう・・・で、それに反応した剣丞側の子達が反発し、外に出て勝負になった・・・って感じかしらね」
春蘭についてよく知っている剣丞は、容易く予想出来てしまい「あ～・・・」頭を上に上げた。
桃香
「と、とにかく!・今は行かないと!?」
話を終え、全員は音の鳴り続ける場所へ向かって走って行った。鳴っていた場所は久遠が待つ様に伝えた場所だった。そこには剣丞の姉達が数名と戦国組数名が立ち会っていた。そしてその真ん中では小柄ながらも自分の倍の長さはある槍を構える小夜叉と、それに対するのは長身で長剣を構える春蘭と呼ばれていた女性。華琳は「やっぱり」と呆れ、結菜は「あの子何やってるのよ!?」と怒り1歩手前だ。
小夜叉
「へぇ～、剣丞の姉って聞いてたからどんなもんかと思ってたけど。剣丞より強いじゃんか」
春蘭
「ふん、当たり前だ。私はまだ剣丞に負けた事などないのだからな!・貴様こそ、中々やるではないか」
小夜叉
「それこそ当たり前だぜ!・悪名高き森一家棟梁、森【小夜叉】長可!・この程度で褒められても嬉しくねぇ!」

売り言葉に買い言葉、互いにヒートアップしていき何合も武器同士をぶつけ合う。華琳達が来た事に気付いた秋蘭と呼ばれていた女性は華琳に声を掛ける。

秋蘭

「華琳様、お話は終わったのですか？」

華琳

「ええ、とりあえず纏まったわ・・・で、大体予想できるのだけど。あれは何？」

あれとは、もちろん戦っている2人の事である。

秋蘭

「華琳様の予想通りですよ、売り言葉に買い言葉。その結果です」

華琳

「はぁ、どう止めようかしら・・・ん、蝶？」

どう止めるか考えていると、華琳の前を何匹もの蝶が飛んでおり戦っている2人の間に向かって行った。しかし、華琳の知っている蝶と違う蝶ということが分かった。その蝶は薄紫色で・・・【バチバチ】と音を立てていたからだ。

結菜

「【雷閃胡蝶】！」

結菜がそう言うと、舞っていた蝶達が・・・【爆発】した。

春蘭

「うわぁ⁉蝶が爆発したぁ⁉」

小夜叉

「この御家流は・・・結菜様！なんで邪魔を・・・ひっ」

対決に水を差され、苛立ちを見せるも結菜の顔を見て言葉が続かなかった。そう、今の結菜の顔は鬼の様だったからだ。

結菜

「当たり前でしょう！私達はただでさえ立ち位置が危ういのに、余計危うくなる所なのよ⁉」

桐琴

「まぁまぁ、結菜様。一応会談がどのような結果になろうと、それ

とこれは干渉せず己が武のみをぶつけ合う・・・と口約束ではありますが、契りをしておるのですよ」

結菜

「だとしてもよ！・・・はぁ。だから桐琴は止めなかったのね」

はぁ～、と溜め息を零し小夜叉に向き合い「邪魔してごめんね、小夜叉」と言い頭を軽く撫でた。「お、おう」と撫でられながら空返事をしてしまう小夜叉。無理もない、鬼武蔵と呼ばれていてもやはり結菜が怒ると怖いのだ。

華琳

「丁度良いから、そこまでにしなさい。まだやれる機会は幾らでもあるんだから」

春蘭

「・・・えっと、それはどういう事ですか？」

小夜叉

「あん？どういうこった、殿？」

久遠

「これから我等は、此処で暮らしていく事になったのだ。故に今決着を付けなくとも良い・・・と、言うことだ」

小夜叉

「マジかよ！殿！」

興奮気味に久遠の近くに寄る小夜叉、その小夜叉を優しく撫でて答える久遠。

久遠

「うむ、マジである」

桃香

「それじゃあ皆さん、もう暗いですから中に戻ろっか。月ちゃん、皆さんを大広間に案内してくれないかな？」

月

「承知しました、桃香様。では皆さん、中へ参りましょう」

月の誘導の元、戦国組と三国組は中へと戻り戦国組は大広間へ案内された。

久遠
「小夜叉、あの方は強かったか？」
小夜叉
「互いにまだ本気じゃなかったけど、アイツ強いぜ。殿」
久遠
「デアルカ。剣丞の姉達の殆どが何かに長けているらしいからな・・・あの方は剣に長けているようだな」
椅子に座り先程の戦いについて小夜叉に訪ね、予想通りの答えが返され笑みを浮かべる。
一葉
「次は余が戦いたいものだ、主様の姉達の実力・・・ふふ、滾るぞ」
幽
「一葉様。だからって刀を抜いて突撃しないで下さいよ・・・？結菜殿が申した通り、我等は立場が良いとは言えないのですから」
一葉
「わ、分かっておるわ。余を戦馬鹿みたいに言うでないわっ」
幽は「えっ？」と顔をし、２人の追いかけっこが始まる。
美空
「一葉様の云々は置いておいて「置いておくなー！」うっさいわね一葉様!!」
光璃
「この世界で生きていく以上、この世界の情報が必要・・・最低限の常識は覚えないと」
朔夜
「まっ、幸いなのは此処が同じ日ノ本って事・言葉が通じる事ね。

この2つが揃ってるなら字も大丈夫だと思うけどねぇ」
　各陣営のトップが集まり今後について相談をし、その光景を少し離れた所から眺める剣丞。
剣丞
「そうだよなぁ、この世界の・・・って言うか今の日本の常識は覚えないと大変だよな。そういうことを考えると、姉さん達かなり頑張ったんだな」
結菜
「確かにそうよね。剣丞のお姉さん達が私達と同じ事を経験しているんだものね」
双葉
「そうですね・・・私達も頑張りましょう、結菜さん。旦那様、ご指導宜しくお願い致します」
剣丞にぺこ、と頭を下げる双葉。その双葉を優しく撫でる剣丞。
剣丞
「もちろんさ。まぁ、姉さん達にも協力してもらえるように俺からもお願いしとくよ」
　気持ちよさそうに目を細める双葉に、それを見て微笑む結菜。そして暫く待つと1人の女性が大広間に入って来た。
???
「皆様、永らくお待たせさせてしまい申し訳ございません。お食事のご用意が整いましたので、私に付いてきて下さいませ」

# 第５話　三国戦国饗宴

???

「皆様、永らくお待たせさせてしまい申し訳ございません。お食事のご用意が整いましたので、私に付いてきて下さいませ」

そう言いながら入って来たのは屋敷内に案内してくれた月と同じ服を着ているがまた違う女性だった。月が可愛い系とすると、彼女は綺麗系だ。その女性は剣丞を見付けると一瞬目を見開き、直ぐに優しく微笑み剣丞の元へ行く。

???

「桃香様よりお話は伺っておりましたが・・・お帰りなさい、剣丞。良い旅だったようですね。ご主人様の様に大勢の女性が一緒とは思いませんでしたが」

剣丞

「うん。良い旅だったよ、美花姉。伯父さんと同じってのは否定したいけど否定できない・・・！」

美花

【英雄色を好む】、正にその通りですね。おっと、話が逸れてしまいましたね。では皆様、こちらへ」

メイドモードに切り替えた美花が先導して歩み始める。その後ろに剣丞達戦国組が付いていく。戦国組が案内されたのは現代で言う立食パーティーを行なう大ホール。大テーブルが複数配置されており、それぞれのテーブルに様々な料理が置かれており戦国組の食欲をそそる。それぞれのテーブル周囲には戦国組を待っていたであろうこの館の住人と思われる多くの女性達もいた。奥のテーブルでは桃香・蓮華・華琳の姿が見えた為、美花はそこへ剣丞達を案内した。

美花

「桃香様、剣丞達をお連れ致しました」

桃香

「うん、ありがとう美花さん。それじゃあ美花さんもパーティーを楽しんでね」

美花
「お気遣い感謝致します。そうですね、私なりに楽しませて頂きます」
美花は桃香に微笑みながら返事を返すと他の女性達の元へ歩いて行った。
華琳
「さて、主役が来たわね・・・剣丞、久遠。こちらに来てくれるかしら？」
華琳に招かれ2人は華琳の元へ行った。
華琳
「とりあえず、今日いる子達に剣丞が帰って来たことを話すわ。その後に剣丞と久遠に軽く挨拶をしてほしいのよ」
剣丞
「なるほどね、了解。久遠は大丈夫？」
久遠
「無論、大丈夫だ。それにしても、聞いてはいたが・・・多いな」
久遠は周囲を見渡し、剣丞の姉達を見る。
華琳
「仕事の関係で居ない子達もいるから、全員ではないけどね。まぁ、半分はいるわね」
久遠
「半分・・・大家族だな」
くすっ、と微笑む久遠。
華琳
「ふふ、そうね。個性が強過ぎる大家族ね・・・それじゃ、始めるわよ」
そう言うと華琳はステージへ上がる。それに2人も続く。中央に設置されているマイクの前に立ち、集まっている皆を見ながら話を始める。
華琳
「さて、今日は集まってくれてありがとうね。事前にメールで伝え

た通り、剣丞が帰って来たわ。色々思うことや言いたいことがあると思うけど、それは本人の挨拶の後にお願いするわ。では、剣丞。いらっしゃい？」

華琳に呼ばれた剣丞は華琳の元へ、久遠も剣丞に続いて行く。剣丞にマイク前に立たせ、華琳は一歩引く。マイクの前に立つと、姉達が「剣丞～！」「お帰り～！」など温かい言葉が飛んでくる。

剣丞

「えっと・・・姉さん達、ただいま！2年前は急に消えて心配かけてごめんなさい。俺が飛ばされたのは戦国時代だったんだ。姉さん達から別世界の話を聞いてたから結構あっさりと納得したんだ。でもそんな世界で生き残ることができたのは、此処にいる皆のおかげなのはもちろん何だけど・・・気を失ってた俺を拾ってくれた彼女がいたから、俺はこの日まで生きてこれたって思う。それが今後ろにいる大切な女の子、織田三郎【久遠】信長・・・久遠のおかげなんだ。久遠、久遠からもどうぞ」

剣丞がマイクから左によけ剣丞が立っていた場所に久遠が立つ。「これに向かって話せば良いのか？」「うん、そうだよ」剣丞が久遠の高さにマイクを合わせ、終わってから久遠が話し始める。

久遠

「我は織田三郎【久遠】信長、織田家当主にして日ノ本を統一した者なり。剣丞の話の通り、我が剣丞を拾ったことが物語の始まりだった。剣丞は我等のおかげと申しておるが、我等の方が剣丞に助けられた。剣丞が居なければ織田・足利・長尾・武田が同盟を組むなどありえなかったであろう。剣丞の姉様方、剣丞を育てて下さり・様々な術を授けて下さり誠にありがとうございます」

そう言いながら姉達が居る方へ頭を下げる。戦国組は驚く者や納得している者に分かれ、三国組は照れ臭そうにしている者や得意げにしている者等に分かれた。

久遠

「華琳殿達と話し合った結果、我等も此処で暮らさせてもらえることになった。至らぬ所もあるとは思うが宜しくしてくれるとありが

たい。我からは以上だ」
久遠は再び剣丞の後ろへ移り、華琳が再びマイクの前に立つ。
華琳
「と、言うことで。剣丞と共に来た久遠達も此処で暮らしていくことになったから皆、仲良くね?それじゃ、待たせたわね・・・剣丞の帰還と久遠達との出逢いを祝して・・・乾杯!」
華琳の乾杯の合図に合わせて会場に居る全員が持つグラスを上へ上げる。そして戦国組と三国組が食事を楽しみながら談笑していく。剣丞は久々に再会した姉達と話をし、それを見守る正室と側室。
光璃
「剣丞、楽しそう」
美空
「ふふ、そうね・・・って言うか、一葉様や朔夜馴染みすぎじゃない?」
一葉と朔夜は三国組の酒豪グループと既に意気投合し酒を飲み交わしていた。
双葉
「もう、お姉様ったら」
結菜
「双葉様、お酒が絡んだらあぁなるのは分かっていた事です。今は忘れて、剣丞の国の料理を楽しみましょう?そして、料理を作って剣丞に食べてもらいましょう」
双葉
「旦那様に料理・・・!はいっ、そうしましょう結菜さん」
2人が興味深そうに料理を楽しんでいると1人の女性が声を掛けてきた。
???
「もしかして、料理に興味があるんですか?」
結菜と双葉は声のした方を向く、そこには淡い緑の髪におでこ部分を上げており、大きめの青いリボンをした女性が立っていた。
双葉

「も、申し訳ございません。えと、貴女様は・・・？」
流琉
「あぁ、ごめんなさい。私は典韋、真名は【流琉】。流琉って呼んで下さい」
双葉
「わ、私は足利【双葉】義秋。双葉とお呼び下さい、旦那様のお姉様っ」
結菜
「私は斎藤【結菜】、結菜と呼んで下さい」
互いに自己紹介し頭をぺこ、と下げる。
流琉
「足利・・・って、え？しょ、将軍の・・・？そんな方が剣丞君の事を【旦那様】って呼ぶなんて、不思議だなぁ」
あはは、と笑う流琉。
双葉
「えっと、流琉お姉様。もしかしてこのお料理って・・・？」
流琉
「お姉様・・・！あはは、何か照れちゃうな。うん、これらは私が作った料理だよ」
照れながらも質問に答える流琉、それを聞いた双葉は目を輝かせる。
双葉
「よ、宜しければ、私に料理を教えて頂けませんか！」
結菜
「あ、私もこの世界の料理に興味があるのでお願いしたいわ」
２人にお願いをされ満更でもない表情をする流琉、そこへ華琳が通り掛かる。
華琳
「あら、人気者ね流琉。２人共、流琉は私が認める料理の達人よ。有意義な時間になると思うわよ」
流琉

「か、華琳様!?」
いきなり現れた華琳、そして褒められた事により照れながらも動揺する流琉。
結菜
「へぇ、これは期待できそうね」
双葉
「流琉お姉様、お願い致します！」
華琳の話を聞いて尚やる気が出た２人。
流琉
「ふふ、良いよ。でも今は料理を楽しんでほしいな、冷めちゃう前にね」
軽くウィンクをし料理へ意識を向かわせる流琉、２人は言う通りにし今は目の前の料理を楽しむ事にした。

皆の様子を見守っていた久遠は、外に開かれたベランダがあることに気付きグラスを持ちながら向かった。外は思ってたより寒くはなく、空を見上げると月が煌びやかに輝いていた。
久遠
「時代、年月、世界が違くとも月の美しさは変わらぬか」

???
「そうかも知れぬな。だが、個人的には月などの美しさは以前の世界の方が美しかった気がするな。この世界は我々の生きていた時代より遥かに進み、技術も発展しているが、その代償としてこの星【地球】を汚す結果になってしまったわけだからな」
久遠は振り向くとそこには高身長で眼鏡を掛けており、自分と同じ位の黒い長髪、桐琴並みに大きい胸の女性がグラスを片手に歩み寄ってきた。
久遠
「すまぬ、剣丞の姉と言うことしか分からぬのだが・・・名を訊いても良いか?」
冥琳
「これは失礼した。私は姓は周、名は瑜、字は公瑾、真名を【冥琳】と言う。お初にお目にかかる、久遠殿」

# 第6話　尾張の大うつけと美周郎

冥琳
「これは失礼した。私は姓は周、名は瑜、字は公瑾、真名を【冥琳】と言う。お初にお目にかかる、久遠殿」
久遠
「周瑜・・・と言う事は、貴女は呉の名軍師のっ！」
冥琳
「はは、かの織田三郎信長にまで名が知られているとは。光栄だ」
笑いながら久遠の隣へ歩いてくる冥琳と名乗る女性。
久遠
「で、では冥琳殿と・・・先程の言、この世界は嫌いでも好きでもないという事か？」
冥琳
「ん？まぁ、確かに嫌いでは無いな。私は雪蓮や蓮華様・・・呉の皆と平和な世を送れるなら、それで良いのさ。心残りがあると言えば、やはり元の世界だな。彼奴の話だと、【この世界に来た我等】と【この世界に来ずそのまま時が過ぎている我等】・・・いわゆる【平行世界】と呼ばれるものがあるらしい。だから心配ではないが、もう会えないとなると寂しいものがあるな」
月へグラスを持ち上げ少し悲しい表情を浮かべながら語る冥琳。久遠もまた少し悲しい表情を浮かべるが冥琳は言葉を続けた。
冥琳
「しかし、私達が戦い、歩んだ事全てが無駄になっている訳では無い。それ等には全て意味があり、その果てに平穏な世の中を手にした・・・その点に関しては久遠殿。貴殿も同じではないか？」
そう問いかける冥琳の嘘偽りのない笑みを浮かべていた。それを見た久遠もまた、笑みを返す。誇らしく。
久遠
「あぁ・・・その通りだ！我と、仲間達と、剣丞と。共に歩み、平和な世を手にした。もし、その話が真なら平和な世を、別の我達が護

り続けてくれるだろう」
冥琳
「会ったばかりだが、その眼は知っている。何事にも臆せず、立ち向かい、成し遂げる者の眼だ。久遠殿、貴殿達なら大丈夫だろう」
久遠
「冥琳殿・・・ふふ、ありがとう」
２人がはなしをしていると機嫌良さそうな高いトーンの声が聞こえてきた。
桃香
「久遠ちゃ～ん！楽しんでる～？飲んでる～？」
久遠
「のわっ!?と、桃香殿!?」
そこに現れたのは完全に出来上がった桃香だった。
冥琳
「おや、桃香殿ではないか。ずいぶんと出来上がっているな」
桃香
「だって剣丞君が帰ってきただけでも嬉しいのに、沢山のお嫁しゃんも一緒なんらよ！お酒もいつもより美味しく感じるよ～♪」
そう言いながらグラスのお酒を呑む桃香。そこへ愛紗がやって来る。
愛紗
「桃香様！いくらそうだとしてもいつもより飲み過ぎです！今日は手に持ってる分で終わりですよ！」
桃香
「えぇ～!?酷いよ愛紗ちゃん～」
ぶーぶー、と口を尖らせる桃香と呆れ顔の愛紗。
愛紗
「それに、あの大人数なのです。料理もそろそろ無くなりはじめていますから」
桃香
「えぇ!?あんなに沢山あったのに!?」

愛紗
「私達の大食いメンバーに加え久遠殿達も居るのです。一部は既に寝ておりますが」
ホールを見てみると、テーブルにあった料理は殆どが空になっており酒豪グループは固まって寝ていた。
桃香
「えぇ～・・・もう少し楽しみたかったなぁ」
冥琳
「こうなっては仕方あるまい、今夜はここまでの様だ。久遠殿、有意義な時間だった。また話し相手をしてくれると有難い」
久遠
「ふふ、こちらこそ楽しかった。是非誘ってくれ、色々な話も聞いてみたい故な」
互いに微笑み合う2人、そして冥琳はグラスのお酒を飲み
冥琳
「さて、愛紗。桃香殿と久遠殿を頼む。私はあの山の馬鹿共を回収せねばな」
そう言い残すと冥琳は寝ている酒豪グループの方へ歩いていった。
愛紗
「では桃香様、参りますよ・・・久遠殿。この宴が終わり次第、美花に泊まる場所に案内させる。暫しの間そこで寝泊まりしてもらう事になる」
久遠
「うむ、気遣い感謝する・・・そなたはあの時の」
この世界に来て華琳と話している際、剣丞を見て名を呼んだ姉の1人と言うのは分かる。
愛紗
「そういえば、自己紹介がまだだったな。私は姓は関、名は羽、字は雲長、真名は愛紗だ。愛紗で構わない、久遠殿」
愛紗は優しく微笑みながら告げる、それにつられ笑みを返し頷く

久遠。愛紗は桃香を連れ中へ戻り、久遠はまだその場に残る事にした。

久遠

「新たな世界、新たな物語・・・ふふ、これからが楽しみだ」

久遠は期待に満ちた眼差しを月へ向けた。そして1時間後、料理やお酒が無くなったことにより宴は終了した。戦国組にも寝てしまった子達が出た為起こす者や抱える者に分かれた。そこへ愛紗が話していた通り美花が久遠達の前へ歩いて来た。

美花

「皆様、宴は楽しんで頂けましたでしょうか?楽しんで頂けたのなら幸いで御座います」

優しく微笑みながら告げる美花。それに対し光璃が返す。

光璃

「とても有意義な時間だった。料理やお酒も美味しかったし、剣丞のお姉さんと話せて楽しかった」

美花

「ふふ、それなら良かった。さて、ではこれから皆様の泊まる部屋へご案内致しますので、付いて来て下さいませ」

宴の部屋を出て廊下を歩く。その途中でふとある事を思い付いた剣丞は美花に聞いてみることにした。

剣丞

「ねぇ、美花姉。オレの部屋って今どうなってるの?」

美花

「安心して下さい、剣丞。定期的に私達で掃除をしています。何か消えたり、増えたりはしていませんよ」

剣丞

「そっか、ありがとう美花姉」

美花

「それは私だけが貰っていい言葉ではありませんが・・・どういたしまして。それはそうと、剣丞は少し慌てる事になると思いますよ?」

剣丞
「え・・・それどういうこと？」
疑問になる剣丞に軽く耳に顔を寄せ
美花
「【消えたり、増えたりはしていない】・・・つまり、部屋の中身は2年前の貴方のままということ。隠していたあれやこれや、それらもそのまま・・・ということです」
剣丞
「っ!?」
美花の話を聞いた剣丞の顔は青ざめていた。
美花
「まぁ、健全な男子なら珍しくはありませんが・・・今の剣丞には不要な物であり、見つかったら誤解を招くかと」
ちらっと剣丞の後ろに付いて歩く戦国組を見る。そこには剣丞的には日常になっているがかなりの美形揃いだ。奥手な者から自信のある者と、その彼女らが健全な男子高校生の隠していたあれやこれやを見た場合、自分に自信を無くしてしまったり嫉妬等もするだろう。
美花
「(まぁ、ご主人様の場合は華琳様を筆頭に全て処分されておりましたが)」
懐かしき出来事を思い出しふふ、と笑う美花。剣丞はバレずにどう処分するかを部屋に着くまで考えることになった。

# 第7話　今後の戦国組

歩く事数分、剣丞達は旅館の大人数が泊まれる様な大広間へ案内された。既にほぼ全員分の布団が敷かれていた。

美花

「こちらが暫くの間皆様が寝ることになるお部屋に御座います。明日から真桜様を筆頭に御住まいを建てる予定ですのでお待ち下さいね。真桜様達が素晴らしいお住まいを建てて下さる筈ですので・・・では、私はこれで失礼致します。剣丞、皆様をよろしくお願いしますね?」

そう言い残し部屋を後にする美花。そして剣丞達は既に寝ている子達を先に布団で寝かせる作業に取り掛かり、寝かせながら自室の事をどう説明するか・いつ過去の自分の遺産を処分するかを考えていた。

そして寝かせ終えた後、剣丞は奥を管理している結菜の元へ行った。

剣丞

「結菜、結菜」

結菜

「何、剣丞?私も疲れたから寝ようと思ってるんだけど」

剣丞

「ご、ごめん。その、本当だったら今日順番の子って誰だったかなって」

結菜

「あぁ、色々あり過ぎて忘れてたわ・・・え?まさか此処でヤる気?」

剣丞

「流石に此処ではしないよ!?じゃなくて、いくら非常時だったとはいえ、順番はちゃんと守らないといけないだろ?それと、そういった事は今後俺の部屋でのみって事にするから」

冗談交じりに結菜が弄ると、剣丞はツッコミを入れながらちゃんとした理由を伝える。それを聞いた結菜は「あぁ、なるほど」と理解し、記憶を思い出す。余談だが、「俺の部屋」という単語が聞こえた瞬間起

きている組は眼を鋭くさせていた。
結菜
「確か今日順番の子は・・・」
???
「今日は夕霧でやがりますよ、兄上」
剣丞の後ろから声を掛けて来たのは光璃の妹、武田【夕霧】信?。
「〜でやがります」という口癖が特徴の女の子。
夕霧
「緊急時でやがりましたから、結菜殿に相談しようと来たのでやがります。しかし、問題は無いようでやがりますな、兄上」
剣丞
「うん。緊急時とはいえ、少なくとも安全な場所だしずっと待たせてる訳だしね」
夕霧
「ふふ、流石兄上でやがります。結菜殿、よろしいでやがりますね?」
結菜
「えぇ、問題ないわ。私も今日剣丞が大人しく寝たら明日調整しないといけないとは考えていたからね。その必要が無くなって逆に助かるわ。待たされた分、可愛がってもらいなさい」
結菜が優しく微笑むと夕霧は顔を真っ赤にし剣丞は苦笑していた。その後、剣丞と夕霧は部屋を出るべく扉へ向かうも、扉近くの布団に横になってた人物が唐突に顔を出してきた。流石の剣丞と夕霧も驚いた。
剣丞・夕霧
「「うわぁっ!」」
光璃
「剣丞の部屋に一番乗り、羨ましい」
顔を出したのは、夕霧の姉であり武田家当主の光璃だった。
夕霧
「あ、姉上・・・」
光璃

「でも、順番は順番。夕霧、思いっきり甘えると良い」
夕霧
「は、はいでやがります！」
そう言い終えると、眼を閉じて寝始める光璃。そしてそれを見届けた後ゆっくりとした足取りで部屋を出る剣丞と夕霧、目指すは剣丞の部屋。

夕霧
「兄上。兄上の姉君は他にも居るのでやがりましょう？後何人位でやがりますか？」
２人で剣丞の部屋へ向かっている際、夕霧は剣丞に素朴な疑問をぶつける。
剣丞
「そうだなぁ、今日何人いたか正確には分からないから何とも言えないけど・・・今日の倍は軽くいるね」
夕霧
「か、軽くでやがりますか・・・兄上の嫁連合と良い勝負でやがりますね」
剣丞
「認めたくないけど、そうなんだよなぁ・・・まさか叔父さんみたいな

状態になるなんて夢にも思わなかったもんな」
夕霧
「兄上を迎えに行った時を思い出すでやがりますよ。夕霧はあの人数で驚いてやがってましたが・・・いやはや、良くも悪くも慣れとは恐ろしいものでやがりますな」
剣丞の顔を見ながらクスと笑う夕霧に、苦笑するしかない剣丞。なんて他愛もない話をしていると目的の部屋にたどり着いた。
剣丞
「夕霧、此処だよ。俺の部屋」
夕霧
「おっ、着いたでやがりますか。では、失礼するでやがりますよ」
そう言いながら剣丞の部屋へ入る夕霧。部屋は定期的に美花達が掃除していた為綺麗にされており、荷物等も整理整頓されていた。
夕霧
「おぉ～これが兄上にの部屋でやがりますか。兄上の住むこの世界の男子はこの様な部屋なのでやがりますか?」
剣丞
「う～ん・・・そうだったり違かったり。趣味の物を置いてるやつもいたしな」
夕霧
「まぁ、それもそうでやがるね・・・あ、これが以前兄上が言ってた『べっど』というやつでやがりますか」
夕霧は剣丞のベッドに腰掛ける。ベッドの初めての感触に「おぉ」と声をもらす。剣丞も夕霧の隣に腰を下ろす。
剣丞
「どう・・・って聞いても座っただけじゃ分からないか」
夕霧
「そうでやがるね・・・兄上、是非良さを教えて欲しいでやがります」
剣丞に抱き着き上目遣いをし、そう告げる夕霧。その問いに剣丞は
―――
剣丞

「緊急時だがら、夕霧は素直に寝ると思った」
剣丞は優しく夕霧を寝かせ、覆いかぶさる。
夕霧
「ひと月位待ったのでやがりますよ？でも、夕霧のことはしたない子って思うでやがりますか」
剣丞
「そんなこと思うわけないよ、夕霧。待たせてごめんね、ちゃんと満足させるから」
夕霧
「ふふ、期待してるでやがるよ。兄上」
２つの影が１つになり、ベッドに倒れていった

華琳
「まさか、あの子が帰って来るなんてね。もしかしたら私達みたいにって思った事はあったけど・・・ふふ。本当に面白い子だわ、剣丞」
???
「そうですわね、お姉さま。私も帰ってくるなんて思いませんでした

わ・・・あの方々、如何致しますか？」
華琳
「そうね、暫くは大広間でこの世界についての常識を叩き込むわ。そうでないと街に買い物で大騒ぎだもの・・・私達の時の様に」
???
「・・・あの時は一刀さんに感謝してもしきれませんわ、思い出したら冷や汗ものですわ。出掛ける前に刃物の所持を厳禁していたはずでしたのにまさか隠し持っていたなんて」
華琳
「・・・と、とりあえず。それらを叩き込むまで敷地から出ることは禁じましょう。栄華、説明をお願いするわね」
栄華
「畏まりましたわ、お姉さま。そういえば、子供達にも話さなければなりませんわね」
華琳
「あ、忘れてたわ。まぁ、あの子達なら嫌う様なことはならないでしょうけど・・・ふふ、ただでさえ退屈とは程遠い所なのに、更に賑やかになるわね」
ふふ、と笑みを零す華琳に対し苦笑をする栄華。
栄華
「お姉さま、確かにそうですけどあれほど大勢が共に暮らすということは、その分出費も増えるということですわよ？まぁ魏・呉・蜀の殆どの方々が働いておりますから金銭面は大丈夫だとは思いますけれど・・・まさかお姉さま、こうなることを見越して会社を立ち上げたのですか？」
そう、華琳はこの現代で会社を立ち上げ・・・まぁ、当然と言っては何だが成功し大きな会社へと育てあげた。会社名は【Ｔｒｙ（トライ）】。
華琳
「そんなわけないでしょう・・・流石にあの時は自分達のことで精いっぱいよ。まっ、あの時は仕事してるっ！て感じがして面白かったけどね」

栄華
「お姉さまがこの時代に対して適応能力がずば抜けていて正に目から鱗でしたわ・・・お姉さまはどの時代に行っても大丈夫なのでは？と思いましたもの」
華琳
「流石にそんな転々としたくないわよ、もうこの日本に慣れたし気に入っているもの」
栄華
「とりあえず明日の朝食後、剣丞とお連れ様方にお話ししておきますわね」
華琳
「ええ、よろしく頼むわ栄華」